

新訂 和漢藥

医学博士
赤松金研著

新訂 和漢藥

医学博士
赤松金芳 著



医歯薬出版株式会社

<著者略歴>

赤松 金芳

明治29年3月12日生

大阪道修薬学校(現大阪薬科大学)

大正元年卒 薬剤師試験合格 千葉

薬科大学薬物学専攻 帝国学士

院日本科学史編纂嘱託 湘南工業

専門学校教授 昭和薬科大学教授

文部省迷信調査協議会委員 神奈

川県横須賀児童相談所長等歴任

昭和54年4月29日 勲三等瑞宝章

叙勲

現在、京浜女子大学名誉教授 学

校法人京浜大学理事 日本医史学

会名誉会員 日本児童学会名誉会

員 医学博士



新訂 和 漢 薬

定価 24,000円

昭和45年4月20日 第1版第1刷発行

昭和55年3月1日 第1版第3刷発行

著者 赤松 金芳

発行者 今田 喬士

印刷者 竹内 勝之

発行所 医歯薬出版株式会社

〒113 東京都文京区本駒込 1-7-10 振替東京 9-13816

東京本郷局私書箱 第8号 電話 東京 (03)944-3131(大代)

乱丁、落丁の際はお取り替えます。

印刷・壮光舎印刷/製本・明光社

© Kaneyoshi Akamatsu, 1970.

<検印廃止>

序

本書は和漢薬の文献に精通した著者が、上巻のみを発表して太平洋戦争の為に中絶した著作を完全に総合して、漢方医薬界に見参しようとする著者の意欲の現われである。

現在、医療界を席卷しつつある漢方治療の重要な担い手は処方であり、此の処方の構成は個々の薬品の集合から成る。現在漢方で治療を施しつつある医師は、自身の使用する薬物が果して所期の効果を挙げつつあるや否やを観察するためには、標準薬物の効果を熟知せねばならない。個々の漢薬には近代医学の云う有効成分を指摘できないものが多く、一個の漢薬自身が有効成分と考えて処方されている。従って、その効果は正確な治験例に依存すべきである。著者が特に文献引用に多大の労を惜しまなかつた本書こそ、臨床家の好伴侶である。敢て本書を世に薦むる所以である。

昭和45年3月

朝比奈 泰彦

(東京大学名誉教授 薬学博士)

序

著者医学博士赤松金芳君との親密な交遊は、すでに44年も続いている。私が千葉医科大学（現在の千葉大学医学部）の創立に当って、初代の薬理学講座担任教授に任ぜられたのは大正13年2月で、赤松君がこの講座の研究生として入室されたのは昭和3年であった。伝統もなく生れたばかりの教室で研究施設も不備なうえに、指導者も34歳の若い教授ただ一人であったが、1、2年の内に集まった教室員も10名を越え、賑やかなうちに研究の意欲がみなぎっていた。

当時、誕生したばかりのこの若い教室で、発掘された研究課題に、和漢薬の有効成分としてのフラボン系色素があった。これは赤松君にとっては打ってつけの問題だった。同君は並々ならぬ創意と熱意をもって、これに取組み、槐花に含まれているルチン（フラボン色素の一種）に利尿作用があり、漢方で槐花が血尿に用いられるのは、このルチンの作用に帰すべきであろうと推定し、蕎麦葉、芸香葉等も同じくルチンが有効成分であること、またルチンのアグリコンであるクエルセチンは櫛の主成分であるとしている。

最近の治療界で特に目立っているのは、和漢薬または民間薬ブームであろう。これを標榜して売りだしている医家もあるようである。思うに和漢薬は東亜の民族が数千年の間、その生命を託して来た療法である。その中に真に有効なものがなくて薬物としての命脈を、かくも長期にわたって保ちうるはずはないであろう。しかし、なかには、ただ民間の口碑や迷信によるもの、あるいは学者の哲学的、宗教家の呪文的なもので、医学的根拠に乏しいものも少なくはない。古来の医薬は、まず現代医学、とくに薬理学の篩にかけて正邪を選りわけねばならない。次に自然界から採集した草根木皮の類は、真贋の鑑別が難かしい。これを誤まり、或は産地が違うだけでも正しい効力は期待できない。

こう考えてくると、和漢薬の著作に従うものは、単なる医学者、或は単なる薬学者だけでは充分でなく、和漢の医薬書を読むとともに、生薬学と薬理学に一家言を有することが大切であろう。この意味において、私は赤松博士は、本書の著者として、これ以上の適任者はないと信ずる。

昭和45年3月

福田 得志



凡 例

1. 本書「和漢薬」は、昭和18年に脱稿し、出版の予定であったが、太平洋戦争のため中絶し、終戦後、その紙型が残っていた上巻のみを、昭和21年に出版したが、中・下巻を続刊するに至らず、荏苒20余年を経過した。その間に漢方医学、東洋医学に対する関心がたかまり、従ってその薬物についての成分的、薬理的研究もまた著しく進歩発展し、それらの文献も枚挙にいとまがない程である。茲において、さきに刊行した上巻を訂正増補するとともに、中・下巻として刊行する筈であったものをも、併せて1冊として本書を刊行するに至った。
2. 薬物を植物、動物、鉱物に大別し、いずれも、自然科学的分類法に基づいて記載した。
3. 薬物名は、漢名を挙げて発音式フリガナを附し、別名のあるものは附記した（ただし一般的に行われぬものは省略した）。
4. 薬物は、和名、基本、作用、処方、成分、薬理、考察、参考、文献の各項に分った。
5. 〔和名〕は、主として「本草和名」・「和名類聚抄」・「医心方」・「多識編」に記載するところに拠った。
6. 〔基本〕は、現在自然科学上の名称を挙げ、これに学名を附し、且つ薬用部分を示した。
7. 医効用は、作用および応用の2項とし、〔作用〕は、有毒・無毒の別を示し、且つ漢方医学的薬物作用を掲げ、〔応用〕は漢方医学的適応病証名を挙げた。
8. 〔処方〕は「傷寒論」・「千金方」以下、各時代を代表する処方名を挙げ、その主治病症を附記した。
9. 〔成分〕及び〔薬理〕は、現代医薬学上における業績に準拠し、現在までに判明しているものを可及的収載するように努めた。
10. 〔参考〕は、外国産の同種に属するもので、その成分等の判明しているものは之を示し、且つ、西洋民間におけるその応用について掲げた。
11. 〔考察〕は、現代医薬学上における成分及び薬理作用に基づいて、之を漢方医学的作用及び応用につき考察を加えた。
12. 以上の作用乃至考察の6項目は、薬用部分につき各別に記載した。
13. 〔文献〕は、本邦及び中国における一般成書、並びに雑誌につき、古代より最近に至るまでのものを集録し、且つ主な外国文献をも収載した。その中「神農本草経」は森立之校定本に拠り、「新修本草」は仁和寺本を主とし、「千金翼方」本草部の記載を以て補った。また、わが国最初の薬物書と称せられる「薬経太素」は、現在本が後代の偽撰に係るものであるため省略した。そして、「和蘭薬鏡」は宇田川榕庵の新訂増補に係るものを採り、「遠西医学名物考」とともに和蘭薬物と和漢薬との連繫を示した。

なお、その記載は、一般成書を先にし、年代順に書名(略名)、巻数(ゴジック)を挙げ、明治以後のものには頁数を示した。次に雑誌文献は暦年順により、著者名、研究内容(略記)、雑誌名(略名)、巻数(ゴジック)、頁数を記した。

14. 本書編述に際し、貴重な典籍を貸与せられ、常に御鞭撻御指導を賜った、故富士川游先生の御霊前に泣謝し奉る。また、特に本書のために序文を賜った朝比奈泰彦先生及び、同じく過分なる序文を頂き、且つ薬理学的方面に御指導を賜った恩師福田得志先生の御厚意に対し深謝の意を表する。なお、植物学方面には本田正次博士、動物学方面には故江崎悌二博士、その他各位の御教示に俟つところが尠少でない。また、本書出版につき多大の尽力を賜った医歯薬出版株式会社社長今田見信氏に深く謝意を呈する次第である。

目次

序

凡例

第1編 植物	1
第1門 種子植物（顕花植物）	1
第1亜門 被子植物	1
第1綱 双子葉植物	1
第1亜綱 後世花被植物（合弁花植物）	1
第2亜綱 古生花被植物（離弁花植物，無弁花植物）	178
第2綱 单子葉植物	540
第2亜門 裸子植物	655
第2門 羊齒植物	674
第1綱 ヒカゲノカズラ類	674
第2綱 トクサ類	676
第3綱 羊齒類	678
第3門 蘚苔植物	689
第1綱 蘚類	689
第2綱 苔類	690
第4門 真菌植物	691
第1綱 担子菌類	691
第2綱 子囊菌類	702
第5門 紅藻植物	713
第1綱 真正紅藻類	713
第2綱 ウシケノリ類	717
第6門 褐藻植物	718
第7門 緑藻植物	722
第8門 接合植物	724
第9門 粘菌植物	725

第2編 動物..... 727

第1門 脊椎動物.....	727
第1網 哺乳類.....	727
第2網 鳥類.....	810
第3網 爬虫類.....	843
第4網 兩棲類.....	862
第5網 魚類.....	869
第6網 円口類.....	903
第2門 原索動物.....	904
第1網 尾索類.....	904
第3門 前肛動物.....	905
第1網 腕足類.....	905
第4門 棘皮動物.....	906
第1網 ウニ類.....	906
第2網 ヒトデ類.....	906
第3網 ナマコ類.....	907
第5門 節足動物.....	909
第1網 甲殻類.....	909
第2網 無角類.....	914
第3網 多足類.....	918
第1亜網 唇脚類.....	918
第2亜網 倍脚類.....	919
第4網 昆虫類.....	920
第6門 円形動物.....	952
第1網 線虫類.....	952
第7門 軟体動物.....	954
第1網 頭足類.....	954
第2網 腹足類.....	956
第3網 斧足類.....	962
第8門 環形動物.....	972
第1網 ヒル類.....	972
第2網 毛足類.....	973

第9門 腔腸動物	975
第1綱 サング虫類	975
第2綱 真正クラゲ類	976
第10門 海綿動物	978
第1綱 普通海綿類	978

第3編 鉍 物 979

第1類 水 類	979
第2類 硫 黄 類	987
第3類 砒 素 類	989
第4類 炭 素 類	993
第5類 硅 素 類	998
第6類 アルカリ塩類	1009
第7類 カルシウム塩類	1018
第8類 マグネシウム塩類	1024
第9類 亜鉛塩類	1026
第10類 銅・銅塩類	1027
第11類 銀・銀塩類	1031
第12類 水銀・水銀塩類	1033
第13類 アルミニウム塩類	1039
第14類 錫 類	1040
第15類 鉛・鉛塩類	1041
第16類 鉄・鉄塩類	1044
第17類 金 類	1051
参 考 文 献	1053
索 引	1061

第1編 植物 Plantalia

第1門 種子植物 Spermatophyta

(顕花植物 Phanerogamae)

第1亜門 被子植物 Angiospermae

第1綱 双子葉植物 Dicotyledoneae

第1亜綱 後世花被植物 Metachlamydeae (合弁花植物 Sympetalae)

(1) キク科 Compositae (Carduaceae)

著

〔和名〕 女止久佐^(4,6) 女止^(5,11) 米土久佐, 米登岐⁽⁹⁾

〔基本〕 キク科ノコギリソウ *Achillea sibirica*, Ledeb. の葉, 果実〔或はヨモギ属 *Artemisia* sp. の1種を充つ〕。

葉 (著葉)

〔作用〕 鎮痙, 止痛, 止血⁽¹³⁾

〔応用〕 痞疾, 腹中痞塊⁽⁸⁾ 痙攣, 心腹痛, 疝痛, 鬱憂病, 欬嗽, 崩漏, 吐血, 下血, 痔疾, 漏精, 淋疾, 衄血, 創傷潰瘍⁽¹²⁾

〔成分〕 asparagine⁽¹⁹⁾

〔参考〕 *Achillea millefolium*, L. の草本は achillein, aconitic acid (= achilleic acid),^(a) inulin, asparagine^(c) betonicine, stachydrine, choline, glycyilbetaine^(e) 精油 (cineole^(b) chamazulene^(d) prochamazulene⁽ⁱ⁾) 等を含み, 肺病, 膀胱直腸痙攣に用い, 月経促進, 墮胎剤とし, または創傷, 瘻管に外用され⁽¹⁴⁾, 抗出血性作用があるという。

なお, 花頭には, acetylbalchanolide, millefolide, cerylalcohol, palmitic acid^(j), azulere⁽ⁱ⁾ を含む。

果実 (著実)

〔作用〕 益気，明目，充肌膚，聰慧，不飢，不老，輕身^(1,2,3,7,8)

〔応用〕 陰萎，水腫⁽¹⁾

〔文献〕 ①神農本草上 ②新修本草 ③千金翼方 ④本草和名 上 ⑤和名抄 ⑥医心方 ⑦証類本草 ⑧本草綱目 ⑨多識編 ⑩大和本草 ⑪和漢三才 ⑫本綱啓蒙 ⑬和蘭藥鏡 ⑭西洋民間 158. ⑮和漢藥物 402. ⑯邦産薬植 1. ⑰国訳本綱 5. 16. ⑱和漢標本 1. — ⑲原岡籟太郎，堀部，高野「キバナノコギリソウ成分」藤沢薬研報 3. 4 (1958) : 薬学研究 30. 61 (1958) ⑳ Zanon : Arch. Pharm. 95. 58 (1846) : Ann. Chem. 58. 21 (1846). ㉑ Sieres, Kremers : Pharm. Rev. 25. 212 (1907). ㉒ Rosenthaler ; Arch. Pharm. 263. 561 (1925). ㉓ Ruzicka, Rudolph ; Helv. Chim. Acta. 9. 118 (1926). ㉔ Debska ; Biul. Inst. Roslin Lecznicznych 5. 113 (1959). ㉕ Kosova ; Acta Fac. Pharm. Brunet Bratislav 2. 71 (1959). ㉖ Pailer, Kump ; Monatsh, Chem. 90. 396 (1959) ; Arch. Pharm. (1960), 646. ㉗ Tyihak ; Acta. Pharm. Hung. 30. 286 (1960). ㉘ Racz-Kotilla ; Orvasi Szemle 5. 308 (1959) ; Farmacia (Bucharest) 9. 669 ; 729 (1961). ㉙ Hochmannova, Herout. Sorm ; Coll. Czech. Chem. Comm. 28. 1826 (1961).

ゴボウ 牛蒡

〔和名〕 岐多伊須⁽⁸⁾ 岐多岐須⁽⁵⁾ 岐太岐須^(4,8) 宇末布々岐^(8,5) 宇末不々岐⁽⁴⁾

〔基本〕 キク科ゴボウ *Arctium Lappa*, L. の根，葉，果実。

根 (牛蒡根，牛房根)

〔作用〕 無毒。逐水^(1,2,6,8,10) 輕身，耐老^(1,2,6,8) 消脹，通経脉⁽¹⁰⁾ 発汗，利小便⁽¹⁶⁾

〔応用〕 傷寒，中風^(1,2,6,8,10) 面腫，消渴^(1,2,6,8) 欬嗽，疔瘡^(5,7,8,10) 積血，癰疽，脚緩弱^(5,6,7,8) 肺癰^(7,8) 癩癧，頭痛，風毒，熱毒腫⁽⁷⁾ 勞瘡^(6,7,8,10) 牙齒痛^(5,6,7,8,10) 脹壅，惡瘡，金傷，杖瘡^(6,8) 天行時疾，喉中熱腫，小便不通，月水不通，項下癭疾⁽⁸⁾ 冒寒，傷冷毒痛，痛風，脚痛，頑癬瘡癬⁽¹⁶⁾

〔成分〕 脂肪油 (palmitic acid⁽⁴⁾ stearic acid, phytosterin⁽⁶⁾) 精油，苦味質，植物粘液質，タンニン，inulin^(4,6) adenine, arginine, trigonelline, choline 等

〔考察〕 タンニンの消炎作用と植物粘液質ならびに脂肪油の保護作用等により癰疽，惡瘡等に対する薬効を求む。また驅風作用があるという⁽²⁸⁾。

〔参考〕 西洋民間では古くより利尿薬とする⁽¹⁹⁾。

葉 (牛蒡葉)

〔作用〕 辟風^(6,8)

〔応用〕 金瘡，杖瘡^(6,8)

〔成分〕 タンニン，精油，粘液

〔考察〕 タンニンの収斂作用による薬効を求める。また催吐作用があるという⁽²⁸⁾。

果実 (牛蒡子，大力子，鼠粘子，黍粘子，惡実)

〔用法〕 酒蒸焙乾⁽⁸⁾ 水洗剉細⁽¹⁴⁾

〔作用〕 無毒。明目，補中^(1,2,6,8) 利腰脚^(6,8) 利小便^(6,8,16,24) 潤肺，利咽膈，通十二經⁽⁸⁾ 利肺氣，消腫，追風，清熱⁽²⁴⁾

〔応用〕 風毒腫，筋骨煩熱毒，諸瘰^(6,8) 喉痺腫痛^(8,14) 風水浮腫，頭痛，懸壑喉痺，齩齒瘡，歷節腫痛，斑疹毒，便癰，痘瘡，吹乳⁽⁸⁾ 疹毒，疔瘡，咽喉疹斑⁽²⁴⁾ 癰疽^(8,24)

〔処方〕 ○疔毒復生湯〔疔〕 ○清陽散火湯〔附骨疽〕 ○消腫湯〔癰疽〕 ○清咽利膈湯〔咽痛〕 ○清熱如聖散〔舌腫〕 ○牛蒡子湯〔乳癰〕 ○鼠粘子湯〔耳痛〕

〔成分〕 脂肪油 (palmitic—, stearic—, arachic—, linolic—, oleie acid のグリセリド)，phytosterin (gobosterin⁽³³⁾) 配糖体 (arctiin⁽³²⁾) 六糖類 (arctose⁽³⁸⁾) protease⁽⁴⁰⁾

〔薬理〕 arctiin は中枢に作用して全身の強直痙攣を起し軽度のマウス挙尾反応を呈する。呼吸中枢には少量で刺激後麻痺し，大量では初めから麻痺する。また蛙摘出心臓を軽く麻痺する。蛙後肢血管及び家兎耳殻血管を拡張し，家兎血圧を一過性に下降する。摘出子宮，摘出腸管，運動神経及び骨格筋を麻痺する。利尿作用があるが軽度である。温刺発熱家兎に対しては解熱作用はない。家兎血球及び原虫に対しても大なる毒作用はない⁽³⁵⁾。

〔文献〕 ①新修本草 9. ②千金翼方 2. ③本草和名上 ④和名抄 17. ⑤医心方 1: 30. ⑥証類本草 9. ⑦萬安方 61. ⑧本草綱目 15. ⑨多識編 2. ⑩本朝食鑑 3. ⑪大和本草 5. ⑫和漢三才 94. ⑬用業須知 2. ⑭一本薬選，中：統 ⑮本綱啓蒙 11. ⑯和蘭薬鏡 5. ⑰和漢薬物 402 ⑱和漢薬考，後 215 ⑲邦産薬植 3. ⑳漢薬写真 2. ㉑国訳本綱 5. 154 ㉒和漢標本 1. ㉓朝鮮漢薬 ㉔満洲漢薬 386 ㉕和漢薬植 1. — ㉖岩井慎二「牛蒡葉汁の催吐」東医事新 63. 13 (1879). ㉗田原良純「日本食調査」東化 8. 52 (1887). ㉘竹中成憲「新駆風剂」中外医 395. 17 (1896). ㉙肥田音市，片山「牛蒡成分とジフテリ毒素」細菌 146. 20 (1908). ㉚吉村清尚「食用植物」東化 37. 861 (1916). ㉛吉村清尚，西田「牛蒡成分」鹿児島農 6. 51 (1926). ㉜篠田淳三，川越「牛蒡子成分」薬学 49. 565 : 1165 (1929) ㉝篠田淳三，川崎「牛蒡子油成分」薬学 51. 983 (1931). ㉞辻本満丸，小柳「野菜種子油」東工試 27(15) 79 (1932). ㉟小池漢「アルクチインの薬物学的作用」日薬物 17. 178 (1934). ㊱大槇樹夫「牛蒡子成分」薬学 55. 816 (1935) : 56. 982 : 985 (1936) : 57. 269 (1937). ㊲植木萬策「牛蒡採取」漢方薬 3. 2 (1936). ㊳村上進「牛蒡根の Arctose」Phytochim 15. 105 (1949). ㊴小沢樹夫「牛蒡子成分」薬学 72. 285 : 288 : 551 (1952). ㊵青山虎彦，中島，石川「ゴボウの Protease」茨城大農 10. 37 (1962). ㊶ Dragendorff : Monographie des Inulin (1870). ㊷ Trimble : Amer. J. Pharm. 60. 79 (1888). ㊸ Dean : Amer. Chem. J. 32. 69 (1904). ㊹ Haemsel : Apoth.-Ztg. 18. 744 (1903). ㊺ Schmid, Bielowitzki : Ber. Wiener Acad. II 137. 98. ㊻ Czapek : Biochem. 1. 126 (1905). ㊼ Foldeak, Dombradi : Act. Univ. Szeged, Acta. Phytochem. 10. 91 (1964).

クガイ 苦艾

〔基本〕 キク科ニガヨモギ *Artemisia Absinthium*, L. の草本。

〔作用〕 健胃，驅虫

〔成分〕 苦味質 (absinthiin^(a, d, e) anabsinthiin^(f) artabsin^(j) artemisetin^(h) 精油^(d)
(thujone, thujylalcohol) 琥珀酸^(b) 林檎酸^(c) タンニン, 硝石^(g)

〔考察〕 苦味健胃作用により, 少量は食欲を増進するが, 大量では頭痛, 眩暈を来し, 永く濫用すると癲癇を来すという。その他胆汁分泌作用あり^(k)。

精油は麻醉性があり, 痙攣を起すという。

〔参考〕 欧州民間では, 温暖, 収斂, 消化催進, 利尿, 月経催進の作用があるといい, 腹痛, 胃痛, 食欲欠如, 黄疸, 坐骨神経痛等に内用し, 嚥下筋炎, 爪潰瘍, 溢血, 耳膿漏, 耳痛, 歯痛, 眼病等に外用する^(l)。

〔文献〕 ①西洋民間 118

② Kahler : Arch. Pharm. **34**. 318 (1830). ③ Zwenger : Ann. Chem. **48**. 122 (1843). ④ Luck : Ann. Chem. **54**. 112 (1845). ⑤ Leblanc : Ann. Chem. **56**. 375 (1845) : Compt rend. **21**. 379 (1845). ⑥ Kromayer : Arch. Pharm. **158**. 129 (1861). ⑦ Adrian, Trillat : Compt rend. **127**. 874 (1898). ⑧ Braconnot : J. Phys. **84**. 341. ⑨ Junman, Isaac : Arch. Pharm. **290**. 37 (1957). ⑩ Suchy : Chem. listy **52**. 2099 (1958). ⑪ Novotny, Herout, Sorn : Chem. Ind. (1958) 465 : Collection Czech Chem. Comm. **25**. 1492 : 1500 (1960). ⑫ Böhn : Arzneimittelforsch. **9**. 376 (1959). ⑬ Sommer, Stenescu, Geleceanu-Baltazar : Izuch. Ispolz, Lekarstv. Rastit, Resursov SSSR (1964) 72.

オウカコウ 黄花蒿

〔和名〕 五行久左⁽⁸⁾

〔基本〕 キク科クソニンジン *Artemisia annua*, L. の葉, 種子。

葉 (黄花蒿)

〔作用〕 無毒⁽¹⁾。

〔応用〕 小児風寒驚熱⁽¹⁾

〔成分〕 精油^(d) (paraffin^(e) cineole⁽⁸⁾ l-camphor^(b) sesquiterpene⁽¹⁰⁾ (cadinene, caryophyllene^(a, 10) sesquiterpenalcohol⁽¹⁰⁾ semicarbazone⁽⁸⁾ artemisia-ketone, isoartemisiaketone⁽¹¹⁾ α -pinene, camphene, borneol^(e) cuminaldehyde, phenol, acetic acid, butyric acid⁽⁸⁾ hexanal, benzylalcohol acetate, methylbutyrate, cuminal, caryophyllen oxide, pentacosane, artemisia alcohol)⁽¹²⁾ 苦味質^(d)

種子 (黄花蒿子)

〔作用〕 無毒。下気, 開胃⁽¹⁾

〔応用〕 勞, 盜汗, 邪気鬼毒⁽¹⁾

〔文献〕 ①本草綱目 **15**. ②多識編 **2**. ③大和本草 **8**. ④和漢三才 **8**. ⑤本綱啓蒙 **11**. ⑥国訳本綱 **5**, 48
⑦和漢標本 **1**. — ⑧今田義一「クソニンジン精油」薬学 **37**. 119 (1917). ⑨朝比奈泰彦, 吉富「クソニンジンの精油」薬学 **37**, 489 (1917). ⑩高木誠司「クソニンジン精油」薬学 **38**, 665 (1918). ⑪

朝比奈泰彦, 高木「クソニンジンの精油」薬学 40. 837 (1920). ⑫竹本常松, 中島「クソニンジンの精油」薬学 77. 1307: 1310: 1339: 1344 (1957): 82. 1323 (1962): 薬学研究 33. (4). 271 (1961).
 ⑬ Luck: Ann. Chem. 54. 112 (1845): 78. 57 (1851). ⑭ Kromeyer: Arch. Pharm. 150. 140 (1861).
 ⑮ Schimmel: Ber. Apr. I. 86 (1905): Chem. Zentr. I. 1471 (1905). ⑯ Wehmer: Pflanz. 783.
 ⑰ Rutowski: Chem. Zentr. I. 1307 (1926): II. 1313 (1927). ⑱ Manulkin: Acta. Univ. Asiae Med. VI (34) 45 (1939). ⑲ Tucakov: Perfumary Essent. Oil Record 48. 75 (1955).

セイコウ

青蒿 (草蒿, 蕪蒿)

〔和名〕 於波岐^(4,6) 於八木⁽⁵⁾ 加良与毛岐⁽⁹⁾

〔基本〕 キク科カワラニンジン *Artemisia apiacea*, Hance の全草, 種子。朝鮮ではオトコヨモギ *A. japonica*, Thunb. を充つ⁽¹⁷⁾。

全草 (青蒿)

〔用法〕 童便浸晒乾⁽⁸⁾

〔作用〕 無毒。殺蟲, 明目^(1,2,3,7,8) 補中, 益氣, 補勞, 止血, 止痛, 長毛髮^(7,8) 清暑熱, 解表肌⁽¹⁰⁾ 苦味香竄, 収瀉疏解, 利尿, 発汗, 殺虫⁽¹³⁾。

〔応用〕 留熱, 疥癩, 惡瘡^(1,2,3,7,8) 骨蒸, 虚勞^(7,8,10,18) 久痢^(7,8) (=瀉痢⁽¹⁸⁾) 瘧疾^(8,18) (=間歇熱⁽¹³⁾) 瘰癧, 金瘡, 婦人血氣, 盜汗^(7,8) 熱黃^(7,8) (=黃疸⁽¹³⁾) 經閉, 萎黃病, 処女病, 白帶下, 痛風, 小児頭瘡, 浸淫瘡, 虫症, 欬嗽, 喘息, 腫瘍, 疥癬, 乾癬⁽¹⁹⁾

〔成分〕 苦味質, 精油, abrotanin.

〔参考〕 一種 *A. rutaefolia* の精油中に butyric acid, thujone, cineol, α -terpenyl-butyrate, d- α -pinene, l-camphor あり⁽⁴⁾。

〔文献〕 ①神農本草下 ②新修本草 10. ③千金翼方 3. ④本草和名上 ⑤和名抄 17. ⑥医心方 1. ⑦証類本草 10. ⑧本草綱目 15. ⑨多識編 2. ⑩大和本草 8. ⑪和漢三才 94. ⑫本綱啓蒙 11. ⑬和蘭藥鏡 14. ⑭和漢藥考 後. 681 ⑮国訳本綱 5. 41. ⑯和漢標本 1. ⑰朝鮮漢藥 ⑱滿州漢藥 433: 491.

⑳ Goryasv, Gimaddinov: Zhur. Puklad. Khim. 32. 1878 (1959).

インテンコウ

茵陳蒿

〔和名〕 比岐与毛岐^(4,6) 比岐与毛木⁽⁵⁾ 加和良与毛岐⁽⁹⁾

〔基本〕 キク科カワラヨモギ *Artemisia capillaris*, Thunb. の全草。或は, 朝鮮ではイワヨモギ *A. Messerschmidiana*, Bung. var. (= *A. Iwayomogi*, Kit.) を充てることある。

〔作用〕 無毒, 或小毒。除風湿寒熱邪氣, 益氣, 輕身^(1,2,3,7,8) 解熱, 燥湿, 利水, 発汗⁽²³⁾

〔応用〕 黄疸^(1,2,3,7,8,12,14,16,23) 頭熱^(2,3,7,8) 小便不利^(2,3,7,8,16) 天行時疫、頭痛、頭眩、風眼疼、癥瘕^(7,8) 瘡癤^(7,8,23) 傷寒^(8,23) 熱結、伏瘕⁽¹⁶⁾

〔処方〕 ○茵陳湯、○茵陳円、○通泰丸、○茵陳散^{〔茵陳〕}

〔成分〕 精油⁽⁸⁴⁾ (β -pinene, capillen, capillon, capillin⁽⁸⁸⁾ capillarin, ⁽⁸⁹⁾ keton) 苦味質。果実中には dimethylaesuletin⁽⁸⁹⁾, capillaretin⁽⁸⁵⁾ あり。

〔薬理〕 茵陳蒿水浸液は犬に対し胆汁分泌を亢進し腸管運動を抑制する(果実中の dimethylaesuletin の作用もまた同じ)。

精油は無脊椎動物を麻痺せしめ、蕁後肢血管を少量で拡張し、大量で収縮する。摘出蕁心臓を少量で促進、大量で抑制する。また、家兎血圧を降下し、摘出腸管の運動を抑制する。ミミズ、豚蛔虫の横紋筋を少量で興奮し、大量で興奮後弛緩する⁽⁸⁶⁾。茵陳実浸出液は家兎小腸に対し自働中枢麻痺作用あり⁽⁴²⁾、精油中の capillin は抗カビ作用⁽⁸⁸⁾ 抗糸状菌作用⁽⁴¹⁾ があり、皮膚病性糸状菌に対して効があり、酵母にも有効であるが、細菌には無効である⁽⁸⁸⁾。

〔考察〕 胆汁分泌亢進作用、駆虫作用及び利尿作用による薬効を求む。

〔文献〕 ①神農本草 上 ②新修本草 7. ③千金翼方 2. ④本草和名 上 ⑤和名抄 20. ⑥医心方 1. ⑦証類本草 7. ⑧本草綱目 15. ⑨多識編 2. ⑩大和本草 8. ⑪和漢三才 94. ⑫一本薬選 上 ⑬薬籠本草 下 ⑭薬徴 中 ⑮本綱啓蒙 11. ⑯古方薬議 4. ⑰和漢薬考 前 9. ⑱和漢薬物 406. ⑲邦産薬植 5. ⑳国訳本綱 5.35 ㉑和漢標本 1. ㉒朝鮮漢薬 ㉓満州漢薬 374:479. ㉔和漢薬植 2—㉕猪子吉人「和漢薬論」中外医 285. 347 (1891). ㉖松田定久「茵陳」植物 27. 423 (1913). ㉗岡崎桂一郎「和漢薬性能」実医報 2. 72 (1925). ㉘湯川靖洋、高野、三善「茵陳」実消化 3. 139 (1929). ㉙世良正一、渋江「茵陳蒿種子成分」農化 6. 600:1003 (1930). ㉚寺阪正信「茵陳蒿成分」第50薬会 (1930) ㉛有馬純三、岡本、「カワラヨモギ精油」日化 51. 781 (1930) ㉜高島研造「野艾蒿」岐阜衛昭5(3)1 (1930). ㉝植木万策「茵陳採取」漢方薬 2. 8 (1934). ㉞於達望、王「精油」中華薬学 1. 201 (1936) ㉟太田達男「台湾産カワラヨモギ果実成分」薬学 88. 11 (1946): 乙 88. 28 (1953). ㊱山本裕弘「茵陳蒿精油薬理」日大医 10. 586 (1951). ㊲今井統雄、三瓶「精油」高峰研 4. 51 (1951). ㊳今井統雄、池田、田中、菅原「カワラヨモギの精油」薬学 78. 397:400:405:862:1005 (1956): 生薬 10. 10 (1956): 高峰研 8. 71 (1956). ㊴原田禄郎「カワラヨモギ精油」日化 75. 727 (1954): 77. 990:1036 (1956): 78. 415:1031 (1957): 81. 654:658 (1960). ㊵榎本竹治「カワラヨモギ種子油」日化 78. 123 (1957). ㊶田中喜一郎「カワラヨモギ精油抗菌性」生化学 33. 399 (1961). ㊷伊藤忠信「茵陳実腸管作用」日薬理 57. 15 (1961).

シナ 支那 (摂綿施那⁽¹⁾)

〔基本〕 キク科シナ *Artemisia Cina*, Berg. の花蕾。本邦ではミブヨモギ *A. maritima*, L. クラムヨモギ *A. kuramensis*, Qaz. セメンシナモドキ *A. finita*, Kit. 等を代用する。

〔作用〕 殺虫、健腸、駆風⁽¹⁾

〔応用〕 蚊虫、腹痛⁽¹⁾

〔成分〕 *santonin*, 精油 (*cineole*) *sesquiterpenalcohol* (*temisin*), *dihydroisotemisin*⁽⁴⁾

artemisin。ミブヨモギには *santonin* のほか、精油 (α -*thujone*) ラクトン体 (*monogynin*, *mibulacton*, *artemisia acid*⁽¹²⁾) あり、クラムヨモギには *santonin* (*l*- α -*santonin*, *l*- β -*santonin*⁽¹⁶⁾, *lumisantonin*)^(17, 18) 精油 (*d*- α -*pinene*, *cineole*, α -*terpineol*, *l*-*camphor*, β -*thujone*⁽¹⁶⁾ *camphene*, β -*pinene*, *sabinen*, *l*5, 6-*p-cymene*⁽²⁴⁾) あり。

〔薬理〕 *santonin* の蛔虫駆除作用については、従来、種々の説が唱えられた。即ち、*santonin* は直接蛔虫には著しい作用はないが、これを大腸まで駆逐する作用があるといひ、或は、一旦吸収せられ体内で变化した産物が小腸に排泄せられたものが、蛔虫を麻痺して駆除作用を奏すともいわれたが、その後、*santonin* が蛔虫の頭部中枢神経を興奮的に作用し、痙攣性異常状態となって、運動不能となり、蠕動運動により体外に排泄されるともいふ。*santonin* は神経毒で、薬用量でも黄色視、幻視、幻味を起こすことがある。大量では体温下降、失神、痙攣、呼吸停止により斃れる。時として腎臓炎を起し、蛋白尿、血尿を生ずることがある。*temisin*, *dihydroisotemisin* は駆虫作用がない⁽⁴⁾。

〔参考〕 1種 *A. judaica* には *santonin*, *artemisin*, *judaicin* あり^(k)。

〔文献〕 ①遠西名物 31。—— ②木村康一「シナ花」日薬報 20. 17 (1927)。③上田竜太郎「支奈」日薬報 8: 13: 15 (1933)。④中村晴吉、太田、福地「*santonin* を含まざる「シナ花」薬学 53. 1265 (1933): 54. 731 (1934): Proc. Imp. Acad. 9. 91 (1933): 10. 215 (1934)。⑤世木茂「生薬学的研究」薬学 53. 1278 (1933): ⑥慶松一郎「文久以前のシナ花」日薬報 16. 6 (1936)。⑦清水藤太郎「渡来年代考」日薬報 16. 7 (1937)。⑧三橋博「*Artemisia* 属植物の *santonin* 証明」薬学 69. 201 (1948) —— ミブヨモギ——⑨石黒熊夫「精油」56 薬会 (1936)。⑩牧常彦「駆虫作用」臨床児 13(4) (1939)。⑪高杉英男、渡辺、満農試研 40. 85(1943)。⑫刈米達夫、福井、石正「成分」薬学 68. 269: 271・272 (1948): 69. 310 (1949): 78. 710: 712 (1958)。⑬中村悦郎、横川「尿中呈色排泄」成医 65. 244 (1951)。⑭柴田承二、三橋、川谷「成分」薬学 71. 161 (1951): 72. 721 (1952): 73. 793・886 (1953): 74. 794 (1954)。⑮岩佐準三、福田: 生薬 7~8. 49 (1954): 9(2)22: 26 (1955): 京都薬大 3. 70(1955)——クラムヨモギ——⑯川谷豊彦、藤田、大野: 薬学 72. 37: 1003 (1952): 73. 886(1953): 74. 1168(1954): 75. 1456 (1955): 76. 1445 (1956): 78. 50: 53・440: 441 (1958): 80. 800・806: 810 (1960): 82. 165: 171: 179: 186 (1962): 生薬 17. 19 (1963)。⑰黒田勲、吉田、吉井: 薬学 79. 267 (1959)。⑱木下孝三: 衛試報 75. 199 (1957)。⑲山岸、中村、中島: 薬学 74. 1354 (1954)。⑳藤村暢男、渡辺: 薬学 80. 108 (1960)。㉑岩男徴: 塩野義研 10. 1417 (1960)。㉒溝口久次、高橋、中村: 薬学研究 34. 26 (1962)。㉓川谷豊彦、大野: 衛生試 80. 163(1962) ㉔藤田安二、上田、丸山: 日化 84. 429(1963) ——セメンシナモドキ——㉕竹内届夫、川口: 薬学 63. 110 (1943) ——*santonin*——㉖熊谷直樹「網膜作用」東京医 30. 475 (1916)。㉗守中清、石川「駆虫作用」満州医 (1926)。㉘石川精一「血糖作用」満州医 9. 206 (1928)。㉙森田林次「薬理」朝鮮医 21. 1093 (1931)。㉚池口輝雄、成瀬「尿素代謝作用」実薬物 1. 293 (1929)。㉛平尾武「水分代謝」実薬物 7. 263 (1934)。㉜宮地伸一「血糖作用」実薬物 7. 237 (1934)。㉝木村俊雄「血糖作用」実薬物 10. 347 (1936)。㉞高谷淳、荒「中毒」臨床小 11(5) 11 (1937)。㉟吉村邦一「家兔尿中N量」朝鮮医 27(7)76 (1937)。㊱宮島忠「駆虫作用」岡山医 52. 2139 (1940)。㊲刈米達夫、北村、橋本「検出法」薬学 63. 118 (1943)。㊳松本允正「薬理」長崎医 23. 216: 221 (1948)。㊴峰下鉄雄、村上、広瀬「駆虫機転」日薬理 45. 149 (1950): 塩野義年報 1. 6: 3. 215 (1953)。㊵中村悦郎「駆虫機転」成医 65. 237: 241 (1951)。㊶小林芳人、阪東、米倉「排泄」

Proc. Imp. Acad. 28. 380 (1952). ④藤下春敏「排泄」日薬理 48. 288 (1952). ⑤阿部泰夫「化学」武田研 13. 100 (1954): 有機合成化学 13. 575 (1955)—temisin—⑥朝比奈泰彦, 中村, 藤田「構造」薬学 40. 204 (1940): 41. 276 (1941)

⑦ Rosenthaler: Pharm. Zentr. 211 (1926). ⑧ Clemo., Haworth, Walton: Soc. 2368 (1929): 1343 (1934). ⑨ Ghosh. Mukerji: Indian Pharm. 3. 46 (1948). ⑩ Qazalbash: J. Pharm. Pharmacol. 15. 323 (1942): 21. 320 (1950): J. Indian Bot., Soc. 28. 190 (1950): Indian Pharm. 4. 212 (1949). ⑪ Arigoni, Bossard, Bruderer: Helv. 40. 1732 (1957). ⑫ Barton, Mayo, Shafiq: J. C.S. (1957) 929: (1958) 140: 3314. ⑬ Cocker, Crowley, Edward: J.C.S. (1957) 3416: (1959) 1998. ⑭ Rybalko, Bankovski: Trudy Vses. Nauch. Issl. Inst. Lekarslov. Aromat, Rast (1959) (11) 106. ⑮ Fu, Yen, Wang: Yao Hsueh. Hsueh. Pao. 7. 53 (1959). ⑯ Goryaev, Krnglykhina, Polyakov: Trudy. Inst. Khim. Nauk Akad Nauk Kazakh SSR 4. 97 (1957). ⑰ Saber, Kassim: J. Pharm. Sci. V. Arab. Rep. 3(1) 159 (1962).

ボコウ 牡蒿

〔和名〕 波波計久佐⁽⁶⁾

〔基本〕 キク科オトコヨモギ *Artemisia japonica*, Thunb. の葉茎。

〔作用〕 無毒。充肌膚, 益気^(1,2,4,5)

〔応用〕 陰腫, 瘡疾⁽⁶⁾

〔文献〕 ①新修本草 20. ②千金翼方 4. ③本草和名 下 ④証類本草 30. ⑤本草綱目 15. ⑥多識編 2. ⑦大和本草 8. ⑧和漢三才 94. ⑨本綱啓蒙 11. ⑩国訳本綱 5.60

クギユソウ 九牛草

〔和名〕 於加与毛岐⁽³⁾

〔基本〕 キク科ヒトツバヨモギ *Artemisia monophylla*, Kitamura (= *A. integrifolia*, L.)⁽⁶⁾ の葉茎。

〔作用〕 有小毒。

〔応用〕 風勞, 身体痛^(1,2)

〔文献〕 ①証類本草 31. ②本草綱目 15. ③多識編 2. ④本綱啓蒙 11. ⑤国訳本綱 5.61

ガイ 艾 (蓬)

〔和名〕 与毛岐^(8,9) 与毛木⁽⁴⁾ 毛久佐⁽⁹⁾

〔基本〕 キク科ヨモギ *Artemisia princeps*, Pamp. (= *A. vulgaris*, L. var. *indica*, Maxim)